

結果句と経路表現の認可条件について

丸 田 忠 雄

1. は じ め に

本稿の目的は、run, walk, hobbleなどの移動様態 (manner of motion) を表す非能格動詞 (unergative verbs) を語彙的な再帰動詞と分析し、さらに、これらがつくる到達点 (goal) を表すPP-経路 (Path) 項- が結果句 (resultatives) とは統語的資格が異なると仮定し、この類の動詞がつくる補部、及び他の非能格動詞との統語的振る舞いの違いを説明することである。

一般に英語の結果構文は典型的には (1) のようなAPを補部とするものをいい、主動詞が原因出来事 (causing event), APがそれによりもたらされる結果状態 (resulting state) を表すとされているが、結果句として、APの他に (2) のようなPP補部をとることもある。

(1) a. John hammered the metal *flat*.

b. The door broke *open*.

(2) a. John tore the painting *into pieces*.¹

b. I cleaned the floor *into a shiny surface*.

(2) のPPはいずれも結果状態を表すが、(3) のように経路を表すPPも、(1)-(2) と同種の結果句とする立場もある。例えばGoldberg (1995) は、結果句とは経路表現のメタファー的な拡張であると見なす。

(3) a. John pushed the cart *to New York*.

b. John kicked the dog *into the bathroom*. (Goldberg 1995)

一方で、ここでのPPが結果句と同じものと見なされるとすると、結果句一般に課されるとされてきた直接目的語制限 (Direct Object Restriction, 以下DORと略) にとって困った事態となる。DORとは、結果句は主動詞の直接目的語のみを叙述できるとする制限であり (Simpson 1983, Levin and Rappaport Hovav 1995, 以下 L&RH), 非能格動詞 (unergative verbs) の主語に言及する結果句を排除する。

(4) a. *John laughed *hoarse*./John laughed *himself hoarse*.

b. *He laughed *into a fit*./He laughed *himself into a fit*.

c. *He laughed *off his chair*./He laughed *himself off his chair*.

d. The audience laughed the comedian *off the stage*.

¹このようなPPについては本稿 § 6, さらに注 6 も参照のこと。

非能格動詞に分類されるlaughについては、直接 PP/AP 結果句をとることはできず、(4) のようにフェイクの目的語を導入する必要がある。(4a,b,c) はフェイクの目的語が再帰代名詞の例である。

他方で非能格動詞に分類されるにもかかわらず結果表現をとる動詞がある。

- (5) a. John ran/walked/danced *into the room*.
 b. Sally jumped *out of the car*. (L&RH 1995)
 c. The clown wobbled *down the hall*. (Levin 1993:106)
- (6) a. The diplomat flew the new 777 *to Europe*.
 b. Fly American *to Hawaii* for your vacation.
 c. The wise man followed the star *out of Bethlehem*. (RH&L 2001)

run, jumpなどの動詞はいずれも意志的な行為者を主語とし、非能格動詞と分類されるので、その主語は、基底・表面両構造で主語である。したがって、ここでの結果句は、経路項を結果句と見なす立場では、DORの明らかな違反となる。

(6) は表面的には他動詞文で、PPは直接目的語ではなく、主語に言及している。同じ動詞には、PPに加えて経路を表すAP結果句も許される。

- (7) a. She danced/swam *free of her captors*.
 b. You must jump *clear of the vehicle*. (L&RH 1995:186)
 c. The sailors managed to catch a breeze and ride it *clear of the rocks*.
 d. He followed Lassie *free of his captors*. (Wechsler 1997)

このようなDORの問題を解決するために、L&RH (1995) やHoekstra and Mulder (1990) では、移動様態動詞については非能格から非対格動詞 (unaccusative verbs) への語彙変化を仮定し、この過程により、goやarriveと同類の動詞となるとされている。こうして、goやarriveが直接PP補部をとることができるのと同じく、移動様態動詞も Theme項とPath項 (PP) の2項をとることができるのである。

一方で、これらの非能格動詞については、再帰代名詞が出現した (8) のような形式も可能である。

- (8) a. He jumped *himself* out of the car.
 b. I pushed the door open and waltzed *myself* into the room.
 c. Helen wobbled *herself* into the bathroom.

本稿では、このような移動動詞に見られる主語指向のPPの出現、および再帰代名詞の出没がどのような要因によって決定されるのかを明らかにすると同時にDOR ― 記述的な一般化に過ぎない―について説明的な一般化を提案する。

2. 移動様態動詞 (manner of motion verbs)

Levin (1993:105)が ‘run’ 動詞, ‘waltz’ 動詞と呼ぶ動詞類がある。

- (9) a. gallop, jump, march, plod, roll, run, skip, stroll, swim, tiptoe, totter, trot,
walk, ...
b. dance, foxtrot, polka, tango, waltz, ...

これらの動詞はいずれも移動様態 (manner of motion) を表す非能格動詞であるが、既述のように、経路を表す句をとることにより非対格動詞にタイプシフトし, “go by Ving” という意味をもつとされる。

- (10) a. Audrey tiptoed.
b. Audrey tiptoed *to the door*.
(11) a. The couple waltzed.
b. The couple waltzed *to the window*.

しかし、非能格動詞から非対格動詞への語彙シフト―L&RH自身明確にその規則を定式化して提示していない―については、Narasimhan et al. (1996)でその問題点が具体的に指摘されている。このようなシフトの証拠としてL&RH (1995) では4つの論拠、すなわち使役交替、結果句との不共起、X’s way構文との意味的対照、助動詞の選択、が挙げられてきたが、Narasimhan et al. では、これらのそれぞれに対して反証が展開されている。彼らの論拠の紹介はここでの目的ではなく省くが、以下では語彙シフト説は採らず、移動様態動詞は、経路をあらわすPPをとっても相変わらず非能格動詞のままであると仮定して議論を進めていく。

3. PP の 認 可

移動様態動詞は、walk を例にとると、Rappaport Hovav and Levin (1998) (以下RH&L) の語彙意味分析では、(12)のように捉えられる。

- (12) [x ACT<MANNER>]/WALK²

これはwalkが、一定の身体の振る舞いで特徴づけられる行為であることを捉えている。しかしながらこの意味表示はwalkの本質的な意味を捉えていず不十分である。walkなど移動様態動詞は、典型的に移動のための振る舞いを表すもので、動作主体が移動を伴わずに純粋に様態動作のみを行うという場面は例外的と考えられるからである。例えば、*Collins Wordbanks Online* のSampler でwalkedをキーワードにして検索しえられた40例のうち、他動詞用法の一例を除いた39例中37例が経路を表すPPあるいは副詞語句を伴っている。日本語でも、例えば「彼女は優雅に歩いた」という時でも、経路表現が現れていないにも関わらず、ある経路上の進行が

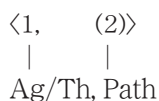
²/WALKの表記は、この意味構造全体に与えられる名前を示している。

含意されている。事実「彼女は一步も進まず優雅に歩いた」は不自然である。したがってwalkの意味は(12)ではなく、(13)のような形にならない(少なくとも CAUSE [x MOVE PATH] の部分は含意されていなければならない)。

(13) [x ACT<MANNER>] CAUSE [x MOVE PATH] /WALK

この表示は、動作主体によって遂行される一定の運動が自らの移動を引き起こしていること、すなわち、再帰的出来事を捉えている。したがって、これらの動詞の主語は、Agentであると同時にThemeでもあり、その項構造は以下のようになる。

(14) walk



これらの表示は、一つには、経路項は意味的には変項の資格をもつが、項構造では一したがって統語的には一随意的な要素であることを示している。さらに表示(14)は、(10b), (11b)の主語NPは、AgentとThemeの2つの意味役割を担っていると主張している。ここで、場所変化の対象 ― 単にThemeではなく、場所変化に関わる項としてTheme_{COL} (COL=change of location) と表記する ― の存在が、Path項を認可するとしてみよう。移動様態動詞の主語はAgentであると同時にTheme_{COL}でもあるので、これらの動詞には経路を表すPPが生起できるのである。(6)の他動詞文においては、主語NPがTheme役を担っており、これに関連するPath項の生起が可能となる。一方、Theme項を含まない非能格動詞はこのようなPPと共起することができない。

(15) a. *John exercised *into the room*.

b. John laughed *into the room*. (≠ John moved into the room while laughing.)

(15a)でexerciseは、JohnにTheme_{COL} 役を与えず、したがってPath項を認可することはできないのである。(15b)でも、PPはJohnの経路とは解釈されず、むしろ放出された笑い声(暗黙的Theme)の方向を表している。

非能格の移動様態動詞にみられる、主語NPによる意味役割の重複所有は典型的な再帰動詞であるshaveに見られる性質である。

(16) John shaved.

Ag/Pat

上でTheme_{COL}項の存在がPath項を認可すると述べたが、shaveの場合は移動を表しはしないのでPath項を認可することはない。shaveはPatient項から髭などを除去するという‘remove’の意味を含むので、補部として、この種の動詞に典型的なof句を許容する。

(17) He shaved of all his hair.

一方、shaveのような再帰動詞は、随意的に再帰代名詞が実現された形式ももつ。

- (18) a. He shaved (himself).
 b. He washed (himself).
 c. She dressed (herself).

移動様態動詞も再帰動詞と分析されるとすれば、同様の再帰形の出現が予測される。(8)からこの予測は正しい³。

上で、Theme_{COL}の存在が、たとえ非能格動詞であってもPath項を認可すると仮定したが、関連して、状態変化 (change of state: COS) の対象である Theme_{COS} は、状態変化を表す結果句を認可できると仮定してみよう⁴。この仮定は以下のように正しい。

- (19) a. The door broke *open*.
 b. The ice melted *liquid*.
 c. The pond froze *solid*.

このような仮定のもとでは (4a,b,c) の非文法性は、laughについてはTheme_{COS}役を付与できないので、そもそも結果句が許容されない、として説明できる。

4. 再 帰 構 文

非能格動詞で、laughのようにTheme役を付与しない動詞については、経路項にせよ結果句にせよ認可されない。一方 (4) のように、フェイクの目的語や再帰代名詞をとるとこれらの句の生起が許される。RH&L (1998) に従い、本稿はこのような構文を、語彙の生成的な拡張によってもたらされた、本来の非能格動詞とは異なる同音異義語が画定するものと仮定する。彼女らは、普遍的な語彙意味鑄型の目録と、鑄型への既存の語彙の統合 (integration) を仮定し、動詞の多義を説明する。RH&Lが提案する代表的鑄型に (20) がある⁵。

- (20) a. [x ACT (ON y)]
 b. [x ACT (ON y)] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]
 c. [x ACT (ON y)] CAUSE [BECOME [y <PLACE>]]

本稿は、さらに、(21) のような経路項が生起する文 — Goldberg (1995) では使役移動構文 (caused-motion constructions) と呼ばれる — を定義するため (22) の鑄型を仮定する。

³ 本誌のレビューから、予測される再帰形はPath項を含まないNP V X-selfであろうとの指摘を受けた。しかしながら、例えば*John walked himself. のような文は実際には適格ではない。再帰形の出現がPath項に依存しているという問題は、Path項をとることにより動詞の再帰性が際立つという意味的な現象から説明されると思われる。このトピックは次節で扱われる。

⁴ このアイデアはVan Valin (1990)の主張と等しい。Van Valinは直接目的語制限を意味レベルで捉え、語彙概念構造のBECOME述語 — したがってTheme_{COS}は当然伴われる — が結果句を認可するとする。

⁵ L&RH(1995)の表示には「(ONy)」が含まれていないが、ACTで捉えられる事態には、例えば(i)のような他動的なものもあるので、この成分が必要である。

(i) He rubbed his eyes.

- (21) a. Norman kicked the ball into the room.
 b. Mary hit the ball out of the park.
 c. Fred sprayed paint onto the wall

(22) [x ACT (ON y)] CAUSE [MOVE [y <PATH>]]

このような鋳型を仮定すると、これに基づき、語彙統合により生成的に拡張された様々な語彙が予測できる。(23a,b,c)はこの鋳型の[x ACT (ON y)]部にそれぞれlaugh, walk, cutの語彙構造が統合されて導かれたものである。

- (23) a. The audience laughed the comedian off the stage. (=4d)
 b. The boy walked his bicycle up the hill.
 c. John cut the onion into the bowl.

このような語彙統合の結果、(23a)の使役移動構文のlaughは(24a)の項構造をもつ。さらに、(23a)の概念構造[x LAUGH] CAUSE [MOVE [y <PATH>]]で、たまたまy=xとなった再帰構文が(24b)なのである。これは、John likes Mary. に対してJohn likes himself. があるのと同じ関係である。

(24) a. [x LAUGH] CAUSE [MOVE [y <PATH>]]

laugh
 <1, 2, 3>
 | | |
 Ag, Th, Path

- b. He laughed himself off his chair.
 Ag Th Path

(25a,b)もこのような鋳型の統合から定義される文である。(25a)は他動詞のsing文で、(25b)はその目的語が主語と同一の場合である。

- (25) a. The next day his wife and daughters *sang him into heaven*.
 b. Oscar Benito *sang himself into the tops of the charts*.

次に(4a)のフェイクの再帰代名詞(fake reflexive)の出現について考えてみよう。本稿の主張は、動詞のTheme_{cos}の付与能力が、結果句の認可をもたらすというものであった。laughは放出動詞であって、laugherにTheme_{cos}を付与する能力をもっていないので直接主語指向の結果句を認可することはできない。このような場合には(26b)のようにフェイクの再帰代名詞が現れる。

- (26) a. *John laughed *hoarse*.
 b. John laughed himself *hoarse*.

この構文は、laughの本来放出動詞としての性質から画定された構文ではなく、(20b)の鋳型

に基づき派生した同音異義語の laugh, すなわち (27a) が関わっていると考えられる。これが実現されたものが (27b) で, (26b) は y 項が x 項と同一指示的な場合である。

(27) a. [x LAUGH] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]

b. I laughed him out of patience.⁶

(26b), (27b) で, hoarse, out of patience はそれぞれ, Themec_{OS} である him, himself によって認可される。

5. 使役移動構文における経路項の義務性

移動様態動詞文では経路項が随意的であるのに対し, 対応する使役移動構文では義務的であるという事実がある。

(28) a. The soldiers marched (*to the tents*).

b. ??The general marched the soldiers.

c. The general marched the soldiers *to the tents*.

(29) a. The mouse ran (*through the maze*).

b. *We ran the mouse.

c. We ran the mouse *through the maze*. (L&RH 1995)

本稿の主張は, Themec_{COL}が経路項を認可するというものであったが, それがさらに経路項の出現を義務的に要求するかどうかについては触れてこなかった。この点について立場を明確にすると, 本稿はあくまでも, Themec_{COL}が経路項を認可すると仮定するだけで, Themec_{COL}項があれば統語上経路項が義務的に現れなければならない, とは考えない。(28a), (29a)で, たとえPPがなくても, 経路は含意されているのである。ではなぜ, 一般に使役移動構文には経路項の出現が義務的なのだろうか。

この問題は, Verspoor (1997: Ch4) がいうように, 個々の動詞の意味, 語用論的な要因も関わって一様には扱えないようだ。例えば jump の例を見てみよう。

(30) a. The rider jumped the horse. [directional phrase understood]

b. We jumped the horse (*over the wall*).

c. ??We jumped the cat *across the ditch*. (Verspoor 1997)

(30a,b) から jump の場合には経路項の出現は不要であるし, 一方, (30c) では, たとえ経路項が現れても文の容認性が低いという事実がある。

そこで, 一般に使役移動構文では, なぜ経路表現が義務的に必要とされる傾向にあるのかを考えてみたい。本稿は, この問題に, 目的語位置と項とのリンキングの観点からアプローチす

⁶ (27b)で, out of patience の代わりに impatient_{AP}は用いることができない。これは, AP結果構文とPP結果構文の意味構造の違いに帰される問題であるが, 本稿では詳しくは触れない。なお本稿 § 6 の議論を参照。

る。使役移動構文では、動詞が表す行為の遂行者 (effector) は目的語で、主語は単にそのような行為への勧誘 (induction) を行っているにすぎない。Levin (1993:31) が、このような自他交替を勧誘行為交替 (induced action alternation) と呼ぶ所以である。

さてリンクングに戻ると、一般に直接目的語の位置は動作の対象が現れ、動作の主体は排除される位置である。そこで、目的語位置に生起するNP には明確な対象性が理解できなければならないと仮定してみよう。(28b), (29b) で、経路表現がないとthe soldiers, the rat のTheme_{COL}性が隠れ、一方その主体性が際立つ。このような役割を担う要素は、直接目的語位置とリンクしにくいという普遍的な原理があるが、これらの低い容認性はこの原理から帰結すると考えられる。一方、経路表現が明示されると、今度は目的語 NP のTheme_{COL}性が際立ち、目的語位置とのリンクングがスムーズに行われると考えられる。(30a,b)で、経路項が現れる必要がないのは、主語NPが、馬に騎乗して馬をコントロールしているという語用論的状况があるからである。この場合には、馬は明らかな制御の対象として理解でき、直接目的語位置とのリンクングは問題なく行われるのである。このように考えると、たとえ経路表現がなくても、目的語の対象性が際立てば使役移動構文は適格になると予測される。この予測は正しい。(31a,b)は、経路表現がなくても適格とされる。

(31) a. The general marched the soldiers without mercy.

b. The general paraded the soldiers with an arrogant manner. (兼本 1999)

これらの例では、without mercyやwith an arrogant manner の副詞的表現が主語項による目的語項への強い支配を表しており、この意味で後者の被動性が顕著になり目的語位置との関連が適切なものになったと考えられる。

6. AP 結果句は独立した出来事を表す

本稿の主張は、Theme_{COS}, Theme_{COL}がそれぞれ結果句、経路表現を認可するというものであった。本節では、非対格動詞について、この主張の是非を検討してみたい。非対格動詞は通例表面主語にTheme_{COS}項やTheme_{COL}項をとる動詞を言うが、この基準に照らすと、die, slip, wilt, occur, tremble, dropなどはいずれも非対格動詞と見なされる(高見・久野 2002:369)。これらの動詞は、一つには物理的移動を表すものと解釈でき、この場合予測通り経路表現をとることができる。

(32) a. He died *into my arms*.

b. The rug slipped *off her knees*.

c. By evening half of my zucchini plant had literally wilted to the ground. (Website)

d. No damage has occurred *to the eye or surrounding tissues*. (Website)

- e. I trembled *into the driving seat*.
- f. Her earring dropped down *into the ditch*.

同様に, become, go, turn, fallなどの状態変化を表す非対格動詞も結果状態を表す補部をとる。

- (33) a. He became *sick*.
 b. She went *mad*.
 c. The traffic signal turned *green*.
 d. John fell *asleep*.

ここに現れているAPはいずれも動詞の本来の不可欠の補部であるが、一方、結果句として非対格動詞に付加されると非文をもたらす。

- (34) a. *The general died *famous*.
 b. *Mary slipped on the ice *unconscious*.
 c. *The flowers wilted *small*.
 d. *The plane crash occurred *famous*.
 e. *Because of earthquake, the old vase trembled *into pieces*.
 f. *The dish dropped *into pieces*. (高見・久野 2001:369)

まず、(34e, f)については、主語NP (=Theme_{cos}) がTheme_{cos}とは解釈できず、状態変化の到達点を表すPP *into pieces*は認可されず排除される。一方、(34a-d)については、主語NPはTheme_{cos}と解釈でき、本稿の主張からは主語指向の結果句が許されると予測される。しかし実際には結果句は許されず、本稿の説と矛盾することになる。しかし結果表現が次のようにPPの形を取るときには許される。

- (35) a. The breeze died *to a whisper*.
 b. The grass having wilted *into a yellowish-green*.

本稿は (35) の PP も、ある状態への方向を表しているという意味で、抽象的ではあるものの、(32) のPPと同様経路項 (Path_{cos}) と仮定する (Wechsler 2001)。では、(34) で結果句APはどのようにして排除されるのであろうか。

本稿は、同じ結果的な表現であっても、APとPPとでは意味的・統語的に本質的な違いがあると仮定する。経路表現 (PP) については、その指示概念は動詞とともに単独の出来事を構成するが、APの結果句は、主動詞が画定する出来事とは独立した一つの結果状態を表し、さらに両者の間には因果関係 (=CAUSE) が成立していると主張する。

結果構文に含まれる因果関係を厳密に定義すると、Theme項の漸次過程 (incremental process) に連動して結果状態が実現されるとき、両過程に CAUSE の関係が成立するとする (cf. Hoyt (2003))。すなわち、移動様態動詞文 (36a) は (36b) の意味構造をとる一方で、(37a)

は (37b) の複雑な意味構造をもつとする。

(36) a. John went into the room.

b. [MOVE [JOHN INTO ROOM]]/GO

(37) a. The ice melted liquid.

b. [ICE MELT]/MELT CAUSED [BECOM [BE [ICE <LIQUID>]]]/LIQUID

すなわち、結果句―主動詞の下位範疇化には関わらない統語的には随意的な要素―は、主となる出来事に、もう一つ、そこから必然的に帰結する出来事を加える、という機能をもつのである。よって、主動詞が (37) の場合には、the ice (=Themec_{cos}) が liquid を認可すると同時に、氷の融解とその液体状態との間には、前者の漸次的進行が後者の実現をもたらすという表裏の関係になっているという必然的な因果関係がある。一方、(34) の場合はどうだろう。(34a)で、人の死とその人物の有名状態の間には漸次的・必然的な因果関係はない。(34b)でも、花が萎れれば結果的に花が小さくなることはありうるが、花の変化と同時並行的にその状態が実現されていくわけではない。飛行機事故とその有名状態の間にも必然的な関係はない。すなわち、(34)の不適合性は、主動詞と結果句が表す2つの出来事の中に必然的な因果関係が欠けている、として説明できる。他方、(19)においては、主語 NP に起こる変化過程に連動して結果状態が実現されていくという点で、含まれる2つの出来事の間には CAUSE 関係が成立している。

7 結 論

本稿の主張をまとめると次のようになる。まず、移動様態を表す非能格動詞が伴う結果句の意味をもつPPは経路項であって、語彙概念構造中のThemec_{col}項によって認可されるとした。移動様態の自動詞が、直接経路項をとることができるのは、これらが再帰的な意味構造 ([x ACT<MANNER>] CAUSE [MOVE [x <PATH>]]) をもっており、第2の項 x (あるいはMOVEとしてもよい) が経路表現を認可するのであった。一方 laugh のような非能格動詞はこのようには分析できず、直接経路項をとることはできない。laugh が移動を表すためには、語彙の拡張を受け移動成分MOVEを含む新しい意味構造をもたなければならない。こうして (4d) の文が定義されるが、主語項の再帰的な移動を表す場合には、他動詞文の第二項と第一項が同一指示的とならなければならない。

本稿では、DOR が結局は統語レベルでの直接目的語に言及する規則ではなく、意味レベルで Themec_{cos} に言及するものとした。さらに、結果表現がAP の場合には別の制限が加わり、主動詞が表す出来事と AP が画定する結果状態の間に、前者が後者の生起に責任をもつ、という強い因果関係がなければならないと主張した。

参 考 文 献

- Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago: University of Chicago Press.
- Hoekstra, Teun, and Mulder, René (1990) “Unergatives as Copular Verbs,” *Linguistic Review* 7, 1-79.
- Hoyt, Fred (2003) “Incremental Telicity and Extra-lexical Thematic Licensing in English Intransitive Resultative Constructions,” (abstract of the talk) Department of Linguistic Colloquia, University of Texas at Austin.
- 兼本美友 (1999) 「移動様態動詞の使役他動使用法 ― 概念構造のACTとMOVEに基づく意味拡張 ―」 日本英語学会第17回大会口頭発表.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Class and Alternations: A Preliminary Investigation*, Chicago: University of Chicago Press.
- Levin, Beth and Rappaport Hovav, Malka (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Narasimhan, Bhuvana, Vittorio Di Tomaso, and Cornelia M. Verspoor (1996) “Unaccusative or Unergative? Verbs of Manner of Motion,” *Quaderni del Laboratorio di Llinguistica* 10, Scuola Normale Superiore.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1998) “Building Verb Meanings,” In Butt and Geuder (eds.) *The Projection of Arguments*, Stanford, CA: CSLI, 97-134.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) “An Event Structure Account of English Resultatives,” *Language* 77, 766-797.
- Simpson, Jane (1983) “Resultatives,” In Lori Levin, Malka Rappaport, and Annie Zaenen(eds.) *Papers in Lexical-Function Grammar*, Bloomington: Indiana University Linguistics Club, 143-58.
- 高見 健一, 久野 暲 (2002) 『日英語の自動詞構文』 研究社, 東京.
- Van Valin (1990) “Semantic Parameters of Split Intransitivity,” *Language* 66, 221-260.
- Verspoor, Cornelia M. (1997) *Contextually-Dependent Lexical Semantics*, Ph.D. dissertation, University of Edinburgh.
- Wechsler, Stephen (1997) “Resultative Predicates and Control,” *Proceedings of the 1997 Texas Linguistics Society Conference (Texas Linguistic Forum 38)*, University of Texas at Austin, 307-21.

Wechsler, Stephen (2001) “An Analysis of English Resultatives under the Event-Argument Homomorphism Model of Telicity,” *Proceedings of the 3rd Workshop on Text Structure*, University of Texas at Austin.

Licensing Conditions on Resultatives and Path Expressions

MARUTA Tadao

The aim of this paper is to present an analysis in which unergative manner-of-motion verbs like *run*, *walk* and *hobble* are reflexive verbs in that the typical manner performed by the main participant is specifically used for its own movement. Thus in my assumption, the subject bears both agent and theme roles. I also argue that the resultative-like PPs they take are the path argument licensed by the theme status of the subject, which explains the apparent violation of the Direct Object Restriction exhibited by these PPs.